

# 言語宇宙のたわむれ

齊藤光悦歌集『1993－2014』

私家版

(第一歌集『群青の宙』以降)

存在はブックエンドのあいまいな影の輪郭に脅かされて

立ちのぼるマイルドセブンの煙さえ壁に影なげかける黄ばみし壁に

本の間からこぼれた葉 自転しつつありきたりにも床に落ちけり

感傷などとうに無くしたはずなのにゆるやかに朱は地平へ沈む

紙模型のピサの斜塔を吹き倒すゲームの名前「世界の終わり」

彫像の雁首並ぶ薄闇に自動ピアノがモーツァルト弾く

月光に誘われ絵画を抜け出したダリの足長象のスキップ

金色のすすきが原を歩みゆくお前と長い影を忘れず

バラバラに割れた鏡の一片に真っ白い雲 遠いガキの日

見上げれば視界いっぱいの雪の舞い幽体離脱が始まりかける

おごそかに湖の霧晴れゆきぬバルコンに立つ妻の向こうで

気がつけば街にはのっぺらぼうばかり道がひしゃげる烈日のもと

脳髓という物質の中にある言語宇宙の原始への旅

さびしくも響くか <sup>くしやみ</sup> 嚏 夜おそき地下鉄ホームにわれひとりいて

ひんやりと湿った空気につつまれて頬からきたる雪の予感

雲間より夕陽一条そそぎ込み静まりゆきぬ雪景の都市

寝静まる都市上空を果てしなくサーチライトが回りつづける

鳴り響く列車出発ベルの中いつもかすかに呼ぶ声がある

悲しみの堆積物をすこしずつ呼び起こす秋の雨だれの音

うっすらと現れやがて形なす霧の中にいる人の名前は

海までの切符を買って見たけれどやっぱりきょうも会社にいます

雪が降る前の空気と感じつつ自転車をこぐ北へ真北へ

やがて子を誕生せしむ君のその漆黒の瞳<sup>め</sup>の強き光よ

これからは記憶をためてためこもうプラスチックの円盤のなか

だいだいの色した月の正円をぐり抜けんとする鳥類群

生きている心臓、肝臓その他パーツ日本上空を羽つけて飛ぶ

失恋の暗き思いにひたるべく日曜の夜の中島みゆき

「わがひとに与ふる哀歌」暗唱す みゆきの恨み節のまにまに

桃色の形状自在の敷物が千鳥ヶ淵の岸に寄りゆく

長女ひかり誕生

北朝鮮ユーゴスラビアに現実の生命の危機満ちて五月

その月の十一日に生を享け二十一世紀が当然の君

昭和などまして大正明治など異国の歴史教科書なるらむ

汗だくの発熱体を腕に抱き父となりたる俺の当惑

生まれ来し子を抱くこのときこそ永遠と呼べ五月の光

臍の緒でつながれていし母子眠り父は瞳きその父思う

泣きやまぬ子をうす闇に抱きつづけ揺らし揺られて母に抱かるる

残照のオレンジ色の部屋に眠る小さきものの四肢のたわむれ

思い出を自分のものと思えない直立体が橋上にある

骨になる日のこと思う壮大な夕日落ちゆく赤道直下

太陽の周りをおよそ八〇回まわって最後に君とさよなら

自己という歴史的なる一貫性くずれゆきたり異国の夕べ

遺伝子にすべてが操られているならば僕らに自由はあるか

空中の道なき道をゆくとンボわれも気ままに幼年時代へ

木々の葉が微動だにせぬ夕まぐれ「生きているか」と我に問う声

暮れまどうドブ川のうえ吹く風がへドロの息を運んで晩夏

雲間より夕陽一条遠方静まりかえる雪景の都市

血液から酸素をもらい活動し言葉つむげる脳味噌われは

がたごとと揺れる電車でまどろめば遙かなるかなイエス生誕

花火祭 群衆のなか君がいる 時々刻々と照らし出されて

蝉蛻を握りつぶした快感が蘇りくるはるか幼時より

黙々とロボットたちは棒を振り巨大な蚊帳に白球飛び交う

僕からの交信のない夕方を妻は「不条理漫画」と暮らす

百億の眼球と一個の巨大球 回り続けるオブジェのように

真っ白なシーツが風にひるがえり陳腐この上ない僕の夏

死するひと必ずやあるこの瞬間 言語をつなぐゲームに耽ける

夕方の書店の人気ない棚にフーコーの『知への意志』をさがせり

デカルトの思惟を反芻する夜更け遠い世界で妻が寝ている

WWWサーフィンに熱狂する夜ぞアンドロイドの眼まなこぎょろぎょろ

無法地帯わがモニターに世界から狂艶の美女つぎつぎと来る

きつねうどん一味たっぷりふりかけて『沈黙』の作者亡きこと思う

子が猛り狂うように泣く密室のサイドミラーに落日

出生から現在までの「私」が一個一個のシャボン玉のなか

デオキシリボ核酸いわゆるDNAその中にある人の設計図

コンピュータグラフィックで見る四塩基二重螺旋はは美しき構造

精神はすべて分子の活動に還元される太古もいまも

一切の記憶は失われておらず読み出す回路錆びゆきしのみ

脳機能いかに解明せらるとも不磨の非合理「輪廻転生」

刻々と自動上書き保存されるわたくしという記憶装置は

夕焼けの空をみつめる横顔に照り映え陰る晩夏のひかり

振り向けば二つの影を長く曳く<sup>おやこ</sup>父娘でありし荒川の土手

父として死ぬまで生きてゆくのだらう息子としての生をすぼめて

ビルあいには紫陽花ひとむら干涸らびて炎熱ガスに晒されている

的屋風はたまたチンピラ風もいる保育の園の父親レース

我めがけ一目散に駆けてくる光輝をまとう君の姿よ

いずこより聞こえる声かそかにも幼きわれをあやせる母か

みずからの躰に目覚め寝つかれぬ深夜ローンの残債思う

妻と子の躰協奏曲を聞きまたも眠れずローンを思う

病む人のかくも多きか桜咲く世間の喧噪よそに静謐

父という責務の重みかみしめて春爛漫の道を医院へ

警察にしょっ引かれたる罪人のごとく順待つ内視鏡検査

側臥してカラダを軽く曲げて待つ胃カメラはいま洗浄機出る

マウスピースくわえたところでなんとなく覚悟が決まってまな板の鯉

「入ります」医師の言葉は無機的で心安めは言ってくれない

食道を経て胃にいたり胃カメラは小さな潰瘍映し出したり

どぶ川も夕日映えれば美しき 一羽の鷺の影絵動かず

無神論ニーチェの死せる魂と夜更け交感する世紀末

逝くときはたったひとつを望むだろう子らの心に永久に住むこと

ほんとうの星が見えないこの窓にまばたきやまぬ赤いビル灯

ニコチンとアルコール臭ふんぶんの家畜列車に運ばれている

廢材を地表もろとも掘り返す鉄の爪からしたたる夕日

青ふかき空の機影に反射した光り一閃 神の眼光

チャルメラのかなしい音色ひびくたび静まりかえる雨後のビル街

中天の赤い満月追いかけて前後不覚のスピードに酔う

地震すぎて壁に姿を踊らせるわが影法師 さびしすぎる夜

残光の空にブランコ漕ぎいだしカラスと一緒に青春へ帰ろ

夕暮れの雪の最後のひとひらがよぎる日活ポルノのポスター

ダイヤモンドダストの記憶よみがえる語り古された民話ききつつ

街灯に誘われ群れる虫の羽音 歌舞伎町なる喧噪のなか

ほのぐらい街バスの窓に額よせいまの夜景に過去を重ねる

自動車のライトに盗み撮りされた心からっぽのレントゲン写真

世界を覆う球状フィルムの色変化いま視界にはうすきむらさき

すでに滅び宇宙の塵と化したるを思いつつ見る白き星雲

だれもみな世に在ることの原罪を知らん顔して死ぬまで生きる

金輪際話すものかと思いきがおれもおまえもまた酔い沈む

昨日とは違う日になりそうな気がしたけれどきょうも終わった

マスクして目だけ露出する人人が一行に座しスマホを撫でる

目の前に立っているひと両隣りに座っているひと画面没入

ハードカバー両手で支え読むひとの神々しけれ最終電車

父であるために息子であることを忘れていたよ きょう母と会う

家族への別れ告げられず逝きし父 そんな死に様まっぴらごめん

しばれるなあ父は言いけり背を丸め死んで三年過ぎたる父が

日々父は遠くなりけりそして父の死にし年齢近づいてくる

さんざめく夏の夕べを流しゆく阿波踊りなるおとめごあはれ

編み笠の上の両手のひらひらと踊る指先見ていればめまい

編み笠の内のまなざしうっしょ耀けり現世の諸苦はね返さんと

阿波踊りその激情と色艶のパレードはゆく現をやぶり

古き背広そのポケットのハンカチに吸われたはずのあの日の涙

また同じ夢をみている懸命に掻けど進まぬ空中遊泳

通勤の途上にぼくはぼくを視る幼き野心うしろでいだく後姿

木蓮の白い花浮く夕まぐれ父よ母よと泣き叫びたき

死に至る病気じゃないかこの違和感コワいなあけれど飲めば忘れる

あす死ぬと教えてくれたら何しよか 昼酒なめてリスト綴らん

鱧を食う菊正宗を飲みながらあすは剣菱だ鮓でも食おう

橋わたり深川という地に迷いまよいついでに酒場で暮れん

マッサージチェアで眠り込み目覚めれば浦島太郎のごとく老いたる

ハナミズキー一枚枯葉落としたり風にされわれ七秒を舞う

黄に染まる秋の並木みち妻とゆく三十年ってあつという間だ

冬来たりスポーツジムのジャグジーをサル進化系びっしり埋める

夏がゆきたちまち冬が来てしまい秋が恋しいさびしい秋が

ああぼくはあの頃だとかあの日とかあのあのばかりだあれからずっと

## 父の死

母と兄 痴呆の父の襦袢<sup>むつき</sup>替え 窓の外は雪<sup>と</sup> 無臭の結晶

過現未のさかいはあるか 車いすの後頭部にぞ問えどむなしき

いつか来る最期の様を子に見せて眼球に夢まぼろし映す

やがて死ぬ実感迫るさらばえし父ではなくて自分自身の

父死すと直覚したり 呼び出し音深夜の居間に響きつづけて

喪の家に様変わりした実家へと足ふみいれる半信半疑

亡きがらと見守る母が目に入りぬ一枚の絵のごとき時空よ

幼かりし従妹ら厨に立ち働き通夜の食膳ととのいゆける

祭壇に近き壁 這う一匹きの蜘蛛生き生きとわが眼ひく

最高の思い出はなに 祭壇の笑顔に聞いて己にも問う

釜の中へ柩うごきだし母が泣く しあわせだったよ ありがとうね

太陽よあなたの周りを八十回まわった男が燃ゆるけむりぞ

せめて願う最期の意識をゆるやかに家族の絵巻ながれゆきと

何年も離れ暮らした親子ゆえに親しさ薄れそれぞ哀しき

飲み過ぎがたとえ寿命を削りしとて飲まない父は父ならなくに

二十五年父母と住みきて義姉はいま実の子よりも母のために泣く

父死にてわが裡にわずか変化あり路傍の花の色あざやかし

雲間から紫色の光射すわが里あたり新幹線より見ゆ

変わりなき大地と思うわが里を何十度目か後にしてきて

道端にコスモスの群生むれ揺らめいて白と紫いずれや御霊みたま

亡き義父の納骨の儀に帰郷する妻の搭乗機さかいま地を離る

こぞことし二人の父を亡くしたる我ら夫婦も老いそむらんか

臨終をひとり迎えし父なればそうならぬよう生きむと思う

鴨ぬきを肴に爛酒二合ほど夕闇にじむ蕎麦屋の障子

場末なる安居酒屋のこぎたなきカウンターから顕てる思い出

モネの画 印象・日の出 <sup>かげ</sup>影絵の舟 夢中に漕ぐ 昼酒ののち

死について書き連ねたる書物<sup>ふみ</sup>を読むわれの隣りに携帯ゲーム狂

本の間より落ちたる往復葉書<sup>はがき</sup> 成人の日の同窓会報せてありし

小さき娘の手を取り歩く幸福は爺になるまで長いお預け

あちこちの臓器の違和感受けとめて五十に近き冬の通勤

大小の口内炎が接近し今朝まっしろな瓢箪となる

かつて住みし町のはずれに夕べ来てアパートはあの街灯の先

片想いに身を焦がしたる日々思うレバ・シロ・カシラ噛みしめながら

血液をさらさらにして圧下げる日課なりせば無様とて走る

地表から衛星へ飛び回帰する携帯メールの億兆の波

湯島から聖橋経てニコライ堂 雨降るを待つ あのときも雨

誰だおまえあっちへいけと鳩に言う浮浪者ひとり鳩もいっぴき

段ボールの家に住むひと寒かろうきょうなぜかふと憐憫つよし

浮浪者と我との差異は紙一重あのときあそこでああしなかったこと

終電はあの世のような混沌を分泌したただただ北上す

にんにくの臭いほとばしらす口が事業戦略ながながしゃべる

鱧を食う菊正宗を呑みながらあすは剣菱鮓でも食おう

身も心も完膚なきまで打ちのめす大雨ぞ良し傘捨てて立つ

これからのおそらくおよそ三十年過去と未来をいかように視む

さて君の文句を聞いてあげましょう数え切れぬよきょうの舌打ち

職場には社員と社員を目指す者 平静装い牽制しあう

心配は杞憂に終わるたいていはそれでも悩むそれが生き甲斐

このあとのいっばいにはいが確実に明日という日を台無しにする

いささかの違和感もない一日は昼日中からソバ屋で沈没

先輩がたくさんいるので意識せず来たが残年たくさんはない

吉行と開高という酒飲みの酒の話を読みながら飲む

日々生きるあの世この世や過去未来酔いにまかせて考えながら

たこ焼きの熱く柔らかい感触をなぜ思い出す会議の席で

老人と呼ばれるときがやがて来るそれってほんと ほんとにほんと

噛みながらその肉塊の生前の山野駆けめぐる姿思うも

ポタン鍋つつく割り箸その元に人の手指という肉がある

寝静まる先頭車両のその先に広がる間に雪乱れ舞う

みながみな二本の脚で立っていて靴を履いてる裸足はいない

ドアがあき出てゆくひとの先々をいかんともせぬ不況が覆う

日本橋小伝馬町で土佐鶴を飲んでいるのだ岩手生まれが

牡蠣を食う浦霞など飲みながらあすはあさ開だ海鞘でも食わん

頬を打つ木枯らしどこからここに来るはるか昔の氷河期思う

喧騒の都会ふと見上げれば穴があいてるまん丸の月

古き背広そのポケットのハンカチに吸われたはずだあの日の涙

併走の電車の窓にある顔もこっちを見ては見ぬふりをする

きみでない妻など想像できないね だから許せよ きょうも飲み会

夜の吹雪庭木一本なぎ倒し北へ向かいぬわが郷の方へ

画面から受ける光に明るめるかんばせ妖し歩く女の

画面なでる指の先には魔力などありはしないが世界を呼べる

目の前に立っているひと両隣に座るひとびと画面没入

妻 ある夜 辞職願を決然とされど不気味にしたためていつ

二十五年ぶりの異動の通知来ぬ 命令拒否の報復ならん

あたらしき職場さげすむ数々の呼称のひとつ姥捨て山は

きみならば出来るはずだと言う御為ごかしの口の端の吹き出物

いきさつはまあどうあれど目の前に塵あれば拾うそれだけのこと

ハナミズキ枯葉いちまい落としたり風にされわれ七秒を舞う

十年の歳月すごせしアパートに五十男のながき影伸ぶ

落暉いま燃ゆるかぎりを尽くしおり あの時もそう やはり泣いてた

途絶えなく客出入りする拉麺屋ひとり酌せり辛い大関

師のうたを書き写し継ぐ昼過ぎの大吟醸一杯至福なるかな

四半世紀たてど色あせぬ悔いのあり忘れ得ぬ人その文を読む

青ふかくあじさい雨に打たれけり かなしかなしとすすり泣いてる

昼過ぎをクラシック聴きちびちびとワインなめつつ夕暮れるまで

ヘッドホン耳に押し当て目をつむり洞に響かすロシア音楽

宴会は昼の蕎麦屋に限るかな呑んで啜ってちょっと転た寝

吐き出した煙の先に真っ青な空の白雲まぶしすぎるも

花咲きてやがて花散り季はめぐりまた一年のすぎゆきにけり

日曜のたそがれ時の憂鬱を懐かしという老人と呑む

上野から北千住への八分に部下と口角泡をとばすも

わが作歌いつもいつの時も酔うており電車のなかで画面をつつく

喉彦のあらわなるかなこのオヤジされど一流企業の部長

断食の真似事をせり週末に崇めたてまつる聖地なけれど

散り落ちる紅葉いちまい手に受けてたたずめばふと若き日ぞ顕つ

薔薇色に染め上げられし夕空を語る人あり愚痴の酒席に

家、電車、会社、酒場と舞台変え光陰矢のごとき宮仕え

ヘーゲルの弁証法的歴史観 ホッピーの泡見つつ思うも

あとがき

第一歌集『群青の宙』の上梓からほぼ四半世紀が過ぎた。

その後の歌を歌誌「個性」や「熾」などに発表してきたが、発表するだけで取りまとめをしておかなかった。紙の歌誌は散逸し、発表歌はコンピュータに無秩序に残るテキストデータだけとなっている。

理想としては、節目節目に歌集を出版し、区切りをつけながら、歌を作り続けるべきであろう。しかしこの時期、私はそれほど短歌とは関わりが深くなかった。「個性」の解散、師と仰ぐ加藤克巳氏の死去、小説への傾倒などのためである。金も時間もかけて歌集を出版するという気持ちは起きなかったし、歌作に精魂注ぎ込むという態度でもなかった。

2014年、しばらく休会していた歌誌「熾」に復帰した。なぜだか知らないが、短歌一本でゆこうという覚悟のようなものができた。縁あって現代歌人協会の会員にもなった。まずは散逸している第一歌集以降の作品をまとめ、今年からは毎年、一年間の作品から選りすぐった作品だけを収載する私家版の歌集を出すことにした。なおこの毎年歌集は、私のホームページでも電子版を掲載していくつもりである。電子版での発表は、歌壇への認知度という意味ではほとんど力を持たない現在であるが、いつまでもこのままではないだろう。ソーシャルネットワークシステムが、歌壇を変えていく可能性は決して小さくはないと思う。

私の毎年歌集は、積み上げていけば一生歌集になる。このような私家版やウェブ版での発表だけでなく、機を見て書籍としての取りまとめをすることもあろうかと思うが、その時期はまだ茫として見えない。

2014年11月

斉藤光悦